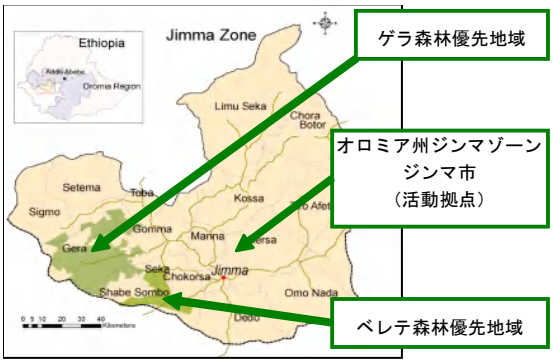
WaBuB PFM News

～Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management～

JICA 技術協力プロジェクト
エチオピア　ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2
2008年1月1日発行 （第 13 号）



謹賀新年

早いもので、このニュースレターも発行から1年が過ぎました。発行当初に比べると、活動の様子ががらりと変わったなと自分たちでも驚いています。この年末年始もエチオピア歴では関係なく、ベレテ・ゲラ内の41の村々では、今日も普及員や村人により、WaBuB のための境界線画定作業や毎週の WaBuB フィールド・スクール（WFS）が行われています。今後もより一層、いろいろな村や活動の様子を皆さんと共有してきたいと願っています。本年も、どうぞ宜しくお願い致します！

ベレテ・ゲラ巡業　～ バラ・デド村の巻～

ベレテ・ゲラ内で64グループによる WFS が開始され、毎週1つを目標に各村をまわっています。大半は片道2～3時間の山道を歩かねばならない上、村での宿泊（もちろん電気・水道はない）になるため、なかなか容易ではありません。乾期の今は炎天下が続いていますが、それでも雨期に比べれば歩きやすいので、今のうちに多くの村を訪れたいと思っています。

12月6日、ゲラ森林内でアクセスの難しい村の1つ、バラ・デド村を目指す。サディ・ロヤ村で車を降り、道案内人を探す。馴染みの普及員が消えたかと思うと、程無く、どこからか男を連れてきた。バラ・デド村の住人らしい。早速、テントや寝袋の入ったリュックを背負ってもらい出発である。急勾配の登り道が続くが、幸い森の中で日差しが遮られ心地よい。のんびりと歩くが、男がなかなか来ない。分かれ道でしばらく待つと、若い女と楽しそうに山を登って来るのが見える。どうやら同じ村の住人らしい。私のリュックは、いつの間にか彼女の馬に載せられている。

お伴の二人と馬一頭

黄金色のテフ畑が広がる

ようやく森を抜けて視界が開けると、どうやら途中の集落に入ったらしい。道端の子供たちが「何だこいつは？」というような顔で、ポカンと口を開けて見つめている。外国人を見るのは初めてかい？集落には、「ここが森林優先地域なの？」と目を疑うように、見渡す限り畑が広がっている。前方に新たな山がそびえるが、山の斜面も木がまばらでパッチワークのように茶や黄、緑の畑が敷き詰められている。ちょうどテフ（主食インジェラの原料）の収穫期で、一面が黄金色に輝いている。男や女が農作業に勤しむ姿が、あちらこちらに見られる。う～ん、きれいだ…。いや、見とれている場合ではない。

山を登りきって標高を測ると2400m。眼下には、広大な集落が見渡せる。絶景ではあるが、木が疎らにしか生えていないのは寂しい。「どうして、ここには森が無いのだろう？」3時間歩いてようやくバラ・デド村にたどり着き、ここで活動するアスチャロウ普及員の家へ転がり込む。挨拶もそこそこに、疑問をぶつける。彼の推測によると、主な原因は2つ。まず、標高が高すぎてコーヒーが生育できない。生計手段は、テフやトウモロコシ、麦を主とした農業である。森林の利用は薪くらいのものであり、保全する動機が非常に低い。2つ目の理由は、ここの住人は、ほとんどが北部アムハラ系の移住者であるらしい。確かに、オロモ語で挨拶をしても通じない人が多い。平地など条件のいい場所には元々オロモ族が住んでおり、移住者は斜面の森を切り開いて居住地としていった。また、オロモが採集・牧畜民の気質であるのに対し、アムハラ族は熱心な農耕民であり、土地を切り開くことを誇りとする気質であるようだ。

疎らに木が残るバラ・デド村

夜、普及員の家の中にテントを張るが、寝袋に入っていても寒い。おまけに、ネズミががさごそと走り回って騒がしい。長い夜に、頭が冴えてあれこれ考える。「こういう所でこそ森林管理を普及する意義があるが、気質や文化まで変えることはできるのだろうか…？難しそうだが、WFS や WaBuB を通じて、少しずつ意識の変化を導いていくしかないだろう…。云々…」あれっ？夕食のインジェラがあたったのか、腹が痛むぞ。おそるおそる冷え込んだ野外に出て、しゃがみ込む。森の中と違って、野生動物を気にしなくていい。あたりは暗闇に静まりかえっているが、見上げれば、満天の星が優しく瞬いていた。

WaBuB は、現地オロモ語で（地域住民により組織される）森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFM は、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

農民の学校 WFS -苗畑作り できるかな？-

～ドゥコ集落 マスフィン普及員の WFS～

トゥマ・テソ村ドゥコ集落のマスフィン普及員による WFS は、9週目のセッションに入っていました。この日はまず、苗畑にする農地をきれいにします。メンバー総出で雑草を抜いたり、固まった土を砕いていきます。男達が嬉しそうに叫んでいるので何かと聞いてみると、「こうした農地の整備は普段は男の仕事だけれど、慣れない手で女性が作業してくれるのが嬉しいんだ！」と言います。「じゃあ、家に帰ったら、今度は女性の家事を手伝ってあげようね。」

みんなで苗畑の整地作業

整地がだいたい済んだあと、4つのサブグループに分かれて苗畑のレイアウト（第12号参照）を仕上げ、苗畑に必要な土や木枠をどこから誰が準備するのか、分担を決めました。この WFS メンバーには32人の中で3人しか読み書きができる人がいないため、1つのサブグループは誰も書けず、なかなか作業が進みません。マスフィン普及員が「水はどこから運ぶの？必要な道具を絵で描いてみよう！」と、工夫しながらサポートしており、感心しました。

絵を描いてみよう！

～ボト・アバボラ集落 アスチャロウ普及員の WFS～

前のページで紹介したバラ・デド村・アスチャロウ普及員の WFS は10週目のセッションに入っており、整地された農地での苗床作りや土の準備が行われていました。

サブグループ毎に、苗床の材料調達、肥やしや土の準備、ふるいの作成に分担し、テキパキと作業をこなしていきます。この手際の良さは、明らかに他の村とは違います。皆が農作業や共同作業に慣れており、如何にも農耕民という様子です。あっという間にふるいが出来上がると、女性がそれを使って根っこや石を取り除き、苗床やポットに使う土を山積みしていきます。

土をふるいにかけます！

苗床はどうでしょう？こちらは木の枠組みができ、土が流れるのを防ぐために底や側面にニセバナナの葉が敷かれました。あとは、ふるいに入れた土を入れて完成です。「さあ、このグループは何の種を植えるのかな？」「玉ねぎ！ニンジン！ニンニク！…」と、農作物の名ばかりがでてきます。あれあれ、この苗床は苗木を生産するための物なんだけどな…・。農作物の種は未だ調達できておらず、「とりあえずプロジェクトから配布されたセスバニアやグレビレアの木を植えよう！」と普及員が言うと、「木なんか植えてどうすんだよ…」という返事。意識を変えるのはなかなか大変そうですが、WFS を通して実際に試すことで、樹木の効果を理解してもらえるよう働き掛けていきます。

苗床できたよ！

森林コーヒーの買い付けが始まりました

12 月 25 日から、シャベ・ソンボ郡（ベレテ森林）で、ビジネス・パートナー契約を締結したコーヒー輸出業者による、森林コーヒーの買い付けが始まりました。例年より遅れて、11 月中旬から本格的にコーヒーの摘み取り作業が始まり、その後、WaBuB メンバーが庭先で乾燥させたコーヒーが、いよいよ輸出業者の手に渡っていきます。認証を受けた森林コーヒーというだけでなく、品質管理にも気を配り1ランク上の「スペシャル・コーヒー」の生産を目指してきた WaBuB メンバーたちは、買い付けに来た輸出業者の反応・評価に一喜一憂していました・・・が、心配は無用。「立派な乾燥コーヒーだ」との太鼓判を押され、「当然だ、俺達が作ったコーヒーなのだから」と自信満々に帰っていきました。

コーヒー買い付けの様子

一方、ゲラ森林では、アファロ集落を含め、今年はコーヒーの不作が深刻で、場所によっては全くコーヒーが実らなかったところもあります。これは、春先の長雨でコーヒーの花が全て散ってしまったことが原因だといわれています。自然現象には勝てませんが・・・残念です。

ベレテ・ゲラの有用樹種

Podo (*Podocarpus falcatus*)

ベレテ・ゲラを含めエチオピアには、かつて数も豊富で材木等として多く利用されていたものの、過剰な利用により危機にさらされている樹種が幾つかあります。そうした樹木の中、エチオピアに自生する5樹種は、オロミア州の法律により一切の伐採が禁止されています。その1つがポドです。1960～70 年代には、質のいい家具材としてイタリアなどに輸出されていたようですが、今では激減し、一部地域でしか見かけられません。ベレテ・ゲラも生息域ではありますが、なかなかお目にかかれません。時折、集落の片隅などでポツンと高くそびえているポドに出くわすと、そのたたずまいの威厳と優しさに、思わず立ち止まってしまいます。

ポツンとたたずむポド

ポドは繁殖が難しく、今や自然での発芽・成長はあまり期待できなくなっています。その原因の1つは、ポドが雌雄異株という特徴を持っていることにあります。日本でお馴染みの銀杏もそうですが、ポドには雄の木と雌の木があります。雌の木のみに果実がつきます。生息本数が減っている為に雄の木からの受粉が少ない上、形状のいい雌の木が好んで伐採されたために雌雄の比率が歪になっており、実をつけても「しいな（種子のない果実）」ばかりであることが多いようです。ポドが自生・繁殖できるような森（ベレテ・ゲラもその1つ）が、エチオピアに残っていくことを切望します。

多くの実をつける雌ポド

発行元：ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ 2 ニュースレターやプロジェクトへのご意見・ご感想もお待ちいたしております。
E-mail: belete-gera@ethionet.et （担当：西村、吉倉） URL: http://project.jica.go.jp/ethiopia/0604584/